

プロトテアトル『XX』演出部座談会

細かい積み重ねで作り上げる町の空気感

※本記事は本作のストーリーなどに関わる内容です。真っ新たな状態で観劇をお望みのお客様はぜひ「終演後」にご覧ください。

編集・テキスト：呉光倩

校正：皆都いづみ

プロトテアトル『XX』は、過疎化している町で繰り返す日常のなか潜む影に、小さな幸せをむしばまれていく人物を描いている。客席に囲まれた舞台上、役者たちが丁寧に積み重ね作り上げた町の空気を感じながら楽しめる作品となる。

今作の演出部では、演出助手2人とドラマトゥルク1人の3人体制で構成されている。上演に当たって、演出部と、演出のF0ペレイラ宏一郎が今回の作品にまつわる感想を交換しながら座談会を開催した。

参加者：作・演出 | F0 ペレイラ宏一郎（プロトテアトル）、以下ペレイラ。

演出助手 | 有川水紀（プロトテアトル）、以下有川。皆都いづみ（シイナナ）、以下皆都。

ドラマトゥルク | 呉光倩、以下呉。

○この作品へのイメージ。

呉：せっかく、今回の座組は演出部が3人もいるので、ペレイラさんも含めて、今回の作品への感想や考えなどを聴けたらと思います。まず最初の質問なんですけれども、この長い稽古期間で初期の頃と今とを比べて、作品に対するイメージは変わっていますか？

皆都：私は『アサ村ショウ一郎』（*プロトテアトル第二回本公演、『XX』の元となる作品）を読ませて頂いていたので、ドラマチックな感じが強い作品になるのかなと予想していたんですが、稽古初期、二幕もので構成されていたのが、一幕になるという話を聞いた時に、この作品のクライマックスはどうなるんだろうと驚きました。一幕自体はただ町の日常を描いているにすぎなかったからです。ですが、稽古が進むにつれて、町を俯瞰していたはずが、気づいたら没入している自分がいまして。ラストでは、関係なかった人々が全員当事者になっていく構図がとてもかっこ良く、探せば探すほど対比が細かくあって、「これが光なのかな、これが闇なのかな」と考えながら観ていてとても面白かったです。

有川：最初に、この作品が二幕構成になるという予定と聞いたんですけど、途中で一幕構成になり、二幕で起こる予定だった大きな対比のエッセンスを一幕に全部ちりばめる、というのはもちろん大変でもあるし、明示されている大きなものも最初と比べて少なくなり、お客さんが見ている、色んな細かいものに気づいていくのがすごく楽しいかなと思いました。

ペレイラ：呉さんはどう思いましたか？

呉：プレ稽古の時に構造とテイストが今と全然違ったものを読ませて頂いたんですけど、かなりインパクトの強い作品だなと思いました。その後しばらく経って稽古に参加したら、作品全体がかなり変わりました、最初の方はまだ鳥役の人にセリフがあり、異質な存在としていたんですが、それ以外の部分は本当に淡々と流れていくだけの日常になっていて、その二つの対比が私は面白いと思いましたね。最終的にその鳥のセリフがなくなり、この町を引きで見られるようになると、自分と関係していないはずの人達が、自分の周りにいるような人達に思えて、私的には一人一人が人間っぽく見ええました。その愛おしい人達がこれだけでもがいているのを見て、悲しい気もちにもなりました。

○役の関係性について

ペレイラ：ちなみに一番好きな関係性や対比とか、この瞬間がいいなと思うところがありますか？僕は前回の通し稽古を公園側から見ていて、佐藤家でひとしが酒を飲んでいる時に「男」役の岡田さんが酒飲もうとするけどやめるところがすごい好きなんです。

皆都：演出なのかわからないんですが、外村が最後フードを被って出てくるのが、男の姿に重なりすごくいいなと思いました。それはどっちですか？

ペレイラ：それは演出ではなく、役者のプランですね。

皆都：なるほどですね。男と外村がすぐ変わる様が色濃く見えて印象的でした。

有川：私は国本に書類を渡された後のアサノさんがすごく好きです。

呉：アサノさんだけ国本さんの存在に疑いを抱いているというところは、アサノがこの町に長く居続けているからこそ、よそ者が入ってきた時の感度が高いのだなと、私は思いながら観ていました。自分の居場所を捨てたくないと思っても、地域の向上のためにやっている政策と想いの方向性が違うし、受け取った後はどんな行動を取るのかなとか、気になりますね。



■何回かの改稿を経て今の形に至る『XX』。最初の頃は鳥が違う役割を担っていた。(写真：河西沙織 (老劇屋))



■ナカメキョウコさんが演じているアサノさん。(写真：河西沙織 (老劇屋))

有川：そうですね。場所を失うとかもありますし、色んな感情が含められた芝居が所作に表れたりしているので、よかったです。

ペレイラ：長い時間観客と一緒にいるからこそ、表現が見えやすいのかもしれないですね。沢山の情報を観客に共有しているから。それも、近くの観客の方が受け取りやすく、遠くにいる観客はもしかしたら気づかないかもしれないけど、そういうところがこの作品の面白いところだと、この間の通し稽古を見て思いました。実は、アサノさんだけではなく、学生たちもちゃんと反応しているのだけれど、若者たちが無視して気づかないふりをしているのに対して、アサノさんはあえて怪しいと疑問を持つ選択をしているというのはなんか少し救いになっているような気がします。

呉：(一番好きな関係性に対して、) 私は、色々ありすぎて、一番とか選べないです。外村と男の関係は壊れているように見えて、実はお互い大事にしているところがあるように私は感じて。その対照として、佐藤家はちゃんといい生活を送っているように見えるけど実は壊れているとか。アサノさんと国本さんの対比もすごく面白いし、学生たちの間も、仲良く見えるけど、どこかしらお互い一步下がって立ち止まっているところとか、いっぱいあります。選びづらいですね。



■様々な関係性による対比がこの作品をより繊細に豊かにさせている。(写真：河西沙織(老劇屋))

○一回だけの観劇じゃ伝えきれない繊細さ。

ペレイラ：これらは、一回の観劇では伝えきれないですね。

皆都：「外村と村瀬の話を、思いがけず内村が聞いてしまうシーン」があるのですが、前回の稽古で、通常で考えると近すぎる場所に内村が立ち止まっていて疑問に思っていたんです。でも、観る場所変えたらちゃんとイヤホンをつけているのを見て、なるほどねと納得できるような芝居で埋めてらっしゃって。そういう細かい芝居の発見がやっぱり四面でそれぞれあって、なので、一回だけではなく、二回は見てほしいです。

呉：それを一回だけで伝えようとするのは違うのかもしれないとも思っていて、目的が強すぎるとこの作品じゃなくなるような気がして、目的が観客から遠いからこそあるこの作品の良さなのかなと思います。違う側に座っていると見えてくるものが違って、その席の人にしか見えない関係性、対比と風景があります。

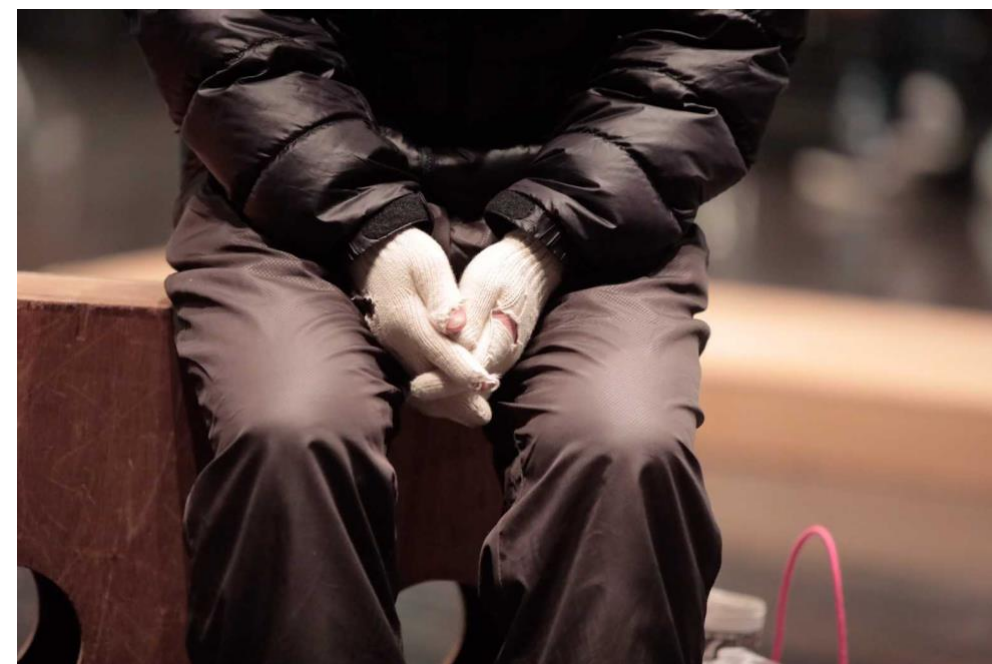
有川：二回と言わずに、四回見てほしいですね(笑)。

○終わりに。

呉：それでは、そろそろ時間なので、ペレイラさん、最後の結語をお願いします。

ペレイラ：この作品は味がすごくする話だと思います。単純な動作でも見方を誰かと重ねることによって印象が変わる作品だと思うので、そういうところを感じてもらいたいし、楽しんでもらいたいと思いながら作品を作りました。どうぞ楽しみください。

呉：すでに観終わった方も、楽しんで貰えていたら嬉しいです。



■岡田望さんが演じる「男」。(写真：河西沙織(老劇屋))